

詠む広場

毎日俳壇

井上 康明 選

白雲の一朵に揺れて桜咲く

唐津市 梶山 守

△評▽春の雲がぼっかり浮かび、
風に揺れながら桜が咲いている。

「白雲の一朵」という、古風で文
学的な表現に味わいがある。

牡丹や頬を寄せあふやうに揺れ

甲府市 清水 輝子

△評▽頬を寄せ合うという例え
はボタンの柔らかい花びらがふよ
かな風に揺れる様子を思わせる。

菩提寺の海光浴びて露の臺

富士市 後藤 秋臣

川二つ越えて句会に春の風

東京 永井 和子

子供の墨磨の音や竹落葉

相模原市 はやし 央

少しつつ傷口癒ゆる日永かな

仙台市 引地 恵一

新任の先生の声窓若葉

鎌ヶ谷市 佐藤 紀子

夜更けまで浅蜩の飛ばす水の音

鎌倉市 前川 卓

月光の銀砂華やく白木蓮

須賀川市 伊豆 周治

春愁や舷を打つ波の音

延岡市 九鬼 勉

片山由美子 選

病室のヒヤシンス咲き外は雨

相模原市 はやし 央

△評▽水栽培のポットに咲いたヒ
ヤシンスだろわか。入院中の身も
また病室にとらわれの気分であ
り、「外は雨」が心にひびく。

新人の氣象予報士花の雨

川越市 大野有之介

△評▽毎日みているテレビの氣象
情報に新人予報士が登場。こんな
ところにも桜の季節らしさが。

春愁やどこへも行かず何もせず

北九州市 篠原 敬祐

山吹や枝を重ねて花重ね

東京 渡邊 顯

学食のにぎはひ春の新メニュー

奈良市 伊東 勝

若布干す若布に濡れながら干す

大洲市 坂本 梨帆

夫道湖へ滑るがごとく蜩舟

松江市 新井 千尋

残雪やメール未読のまま消去

東京 嶋村 純

逃水やセンターライン新しき

長浜市 中島 正則

もつ会へぬ人に会ひたし花の雨

久喜市 小林 通子

小川 軽舟 選

写真館に若き日の母花の屋

西尾市 金子 恵美

△評▽壁に掲げたサンフル写真に
若き日の母が写っている。町にず
っと昔からある写真館に桜の咲く
季節がよく似合う。

遠足のどの子も髣髴すスマホかな

名古屋市 山内 基成

△評▽子供らしい遠足のイメージ
を真切る遠足の光景。これが今の
時代の現実なのだろう。

抜き足で近づくと子らや小鳥の巢

大津市 星野 暁

春の月足湯に足のひしめけり

松山市 中矢 尚

家並の等しく古りぬ鳥雲に

白杵市 村上 玲子

余かの雨山へ海へと紀勢線

東京 関口 昭男

駅ピアノ囲む輪に入る日永かな

北九州市 あけほの聖子

翅音してわが鼻先にくまんぼち

高山市 直井 照男

留学生帰りに国へ鳥帰る

習志野市 横田 高明

論文は数字と記号卒業す

日高市 有元 更紗

西村 和子 選

野球帽脱いで子猫を入れにけり

姫路市 板谷 繁

△評▽捨て猫を連れ帰ったか。ひ
弱な子猫を入れるものが何もない
ので、野球帽を脱いだ機転。草野
球帰りの少年を想像した。

上着手に歩く漢ら夏近し

前橋市 松本 潤

△評▽「漢」と「男」。意味は同
じだが、印象は異なる。「悪漢」
か「好漢」か、季語が語る。

子燕の育つ駅前文具店

東京 徳原 伸吉

せせらぎの音のふくらむ野に遊ぶ

川口市 高橋さた子

軒先を幾度も掠め燕来る

鴨川市 富川 康雄

春寒や来し方を知る姫鏡台

春日市 林田 久子

桜散る黒のセタンの濡れひかる

茨城 杉山 満

春の夜の学習塾の灯りをり

津市 渡邊 健治

卒業や黒板を消す手に力

奈良市 伊東 勝

江戸偲ぶ運河をゆるり花見船

笠間市 伊藤 邦夫

うたは奏でる

猫と人間 染野太朗

・月極めの区画に猫を泳がせて陽を溜め
ているモータープール 岡野太嗣
「モータープール」は関西、特に大阪
で有料駐車場を指すらしい。もちろんほ
かのエリアでも使われる言葉かもしれな
いが、とにかくこれはその「プール」と
いう部分を起点に組み立てられたような
歌だ。プールだからこそ猫は「泳ぐ」と
見立てられ、それによって猫の柔らかな
のんびりとした様子が表現された。そこ
には水でなく日の光がたっぷりと降り注
ぐ。「月極め」の「月」と「陽」をあえ
て対比させて読めば、駐車場と猫の夜の
様子まで見えてくる。都市で暮らす猫を
描いたおもしろい歌だ。
・猫のわるさの跡を目視し猫へゆくとよ
くはげしく阿波踊りして 内山昂太
こちらも猫が登場するが、岡野の一首
とはテイストが異なる。何かをひっきり
返すとか傷つけるとかした飼猫に怒り
をもつて迫る歌、と読めそうだが、それ
にしてもこの人のデフォルメのされ方は
へんである。いやデフォルメではなく、
実際に阿波踊りをしながら猫に近づいて
いるように見える。異様な迫力がある。
・ユーモアを感じる一方で、ふざけている
のかなんなのかわからなくもある。
おのきながら人間を見つめる猫の様子
も想像されてちょっと笑ってしまうが、
猫が相手だからこそ表れた、人間という
ものの不可思議をまず味わいたい。
・猫をわが全存在でつづみ抱くともだち
になつてくれたら魚をあげる 睦月都
これもどちらかと言えば人間のほうが
気になる。すこし屈折した孤独や寂しさを
感じる。(そのめ・たろう＝歌人)